

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	山口 えり
論文題目	日本古代国家の祈雨儀礼と災害認識
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、農耕祭祀でもある日本古代の祈雨(止雨も含む)儀礼とその変遷を災害認識とのかかわりにおいて論述したものであり、6世紀末から12世紀末に及ぶ600年間の祈雨儀礼記録を網羅的に蒐集したうえで考察している。蒐集した資料のなかには、各種の写本や未公開資料も含まれている。本論文は、序章以下、第一部「自然環境と神祇祭祀」、第二部「雨僧正仁海と請雨経法」、第三部「天文異変と災害認識」、そして終章とからなる。</p> <p>序章では、現在における日本古代史研究のあり方を総括したうえで、本研究課題に関する研究史の希薄さを指摘し、本研究課題に取り組む必然性と必要性を述べる。そして、本論文全体の趣旨を要約する。第一部では、祈雨儀礼にかかわる祭祀を時系列的に論述していく。まず、第一章と第二章は、天武4(675)年にはじまり、以後、国家の恒例祭祀となる大和国の広瀬大忌祭と龍田風神祭をとりあげる。広瀬は水神である山口神や県の祭祀を集約する河川の合流地点にあり、龍田は大和と河内を切り結び、偏西風が大和に吹き込む難所にあつて、それぞれ異なる性格をもつが、これを一対として祭祀することで、大和全域を中核とした農業生産を祈念する国家の意図を考察する。第三章は、奈良時代の祈雨儀礼について論述する。旧来、奈良時代の祈雨および農耕祭祀は神祇優先とみられてきたが、むしろ、神祇唯一であることを論証し、農耕祭祀と神祇との緊密な関係を確認する。逆に、仏教と農耕との希薄さを明らかにする。第四章は、10世紀はじめに編纂された『延喜式』の臨時祭祈雨神祭条を解析する。この祈雨神祭条に記載された畿内五か国の諸神が『日本三代実録』貞観元(859)年9月4日・8日両条にみえる祈止雨奉幣神と基本的に同じであることを確認し、悪天候のつく時期に幼帝清和が即位したあと、大嘗祭がおこなわれるのが貞観元年であったことに注目する。そして、幼帝清和の統治安定を企図して大々的におこなわれた貞観元年の祈止雨は、内蔵頭であり神祇大副(のち伯)でもあった中臣朝臣逸志が深く関与しており、『貞観式』編纂にも携わったことを推考する。したがって、『延喜式』の臨時祭祈雨神祭条は『貞観式』を継承したものとみる。ただ、『延喜式』施行前後には、すでに空文化した側面があるという。第五章は、「予防」としての祈雨が9世紀におこなわれるようになったことを問題視する。これまで、祈雨はもっぱら神祇によっておこなわれてきたが、この時期から仏経転読や仏教による修法がはじまり、陰陽寮によるウラナイも加わって、風雨災害を未然に防ぐための儀礼が度々、施行されるようになった。そして、これを促進したのが、神祇伯であり伊勢大神宮祭主である大中臣朝臣淵魚や、陰陽頭を経験した神祇伯の安倍朝臣真勝であったとみる。</p> <p>第二部では、11世紀半ばに没した雨僧正と称される仁海とその請雨経法について詳論する。第一章は、東密の『覚禅抄』を中心素材として請雨経法の受容と展開を把握し、そのなかで仁海が存在を位置づける。不空訳の請雨経が空海によって将来されたが、その施行は空海没後であり、9世紀後半の真雅が神泉苑で実施したのが確実な初見とする。その後、東密の独占的な修法となり、仁海の修法へと至り、小野流として継承されていくとみる。第二章は、仁海の血脈意識と空海伝説の創出を論じる。仁海は、度々の請雨経法に功績のあった元杲を師とし、聖宝と益信のふたつの血脈を束ねた存在であり、空海の神泉苑請雨説話の形成を主導した人物であったことを明らかにする。そして、上級階層の出自でない仁海は、請雨経法の成功を足掛かりにして東寺長者の地位を獲得しようとしたとみる。さらに、同じ東密のなかでの孔雀経法を意識していた可能性もあるという。第三章は、各種の請雨経とその壇法を確認し、不空訳の請雨経壇法が五龍を配置するなどの特徴があることを指摘する。仁海は、この不空訳の請雨経法に准じて祈雨をおこなったが、さらに陰陽道系の五龍祭をも取り容れたところに注目し、その必然性を説く。第四章は、仁海が駆使した請雨経法を高野山大学図書館蔵</p>	

氏名 山口 えり

(寄託)の「請雨法」などによって復元し、その変遷と五龍祭との関係を解明する。陰陽寮によって施行される五龍祭の初見は10世紀初めであり、当初、請雨経法と五龍祭とは個別におこなわれていたが、仁海の祈雨において同時施行となった。それは、もともと請雨経法のなかに「龍供」のことが説かれており、これを踏まえて五龍祭の取り込みがなされたものとみる。付章一は、諸説ある仁海の出自と生年を確定する。多くの関連資料を比較検討した結果、山城国宇治郡の宮道氏出身、天暦9(955)年誕生、92歳で永承元(1046)年没となり、『秘密家宗体要文』の信憑性が高いことを立証した。

第三部では、旱水害を中心とした災害の原因である災因の認識について考察する。第一章は、災害や災異の原因認定の変遷を追い、8世紀には天皇の「不徳」、9世紀には「崇」、10世紀には「理運」がそれぞれ主な災因とみられていたことを論究する。第二章は、従来検討されることのなかった、天体の動きと災害とを結びつける「理運」の思考を解明する。9世紀後末に萌芽がみえる「理運」の思考は、陰陽道の形成とともに日本で生まれ、災害の事前事後における災因論となり、神祇官もこれに参加するようになった。ただし、これ以前の災因認識である天皇の「不徳」、「崇」を排除するものではなく、そこには「積層性」があることを指摘する。第三章は、災害が起きるとされる「理運」の「三合」歳(大歳・害気・太陰の三神相合の歳)の算出法を、『三合勘文部類』とその他の諸文献とを比較しながら解析し、第四章で、『三合勘文部類』の諸本調査と翻刻を公表する。15世紀後末から16世紀前半にかけての四種の勘文を載せる本書の最古写本は東山御文庫本であり、賀茂氏正流の勘解由小路家から土御門家、一条家を経て天皇家(後水尾ないし後西)へと伝来書写されたことを論証する。また、東北大学附属図書館蔵本(岡本本)は、これら(高松宮家・徳大寺家諸本を加える)と別系統のものともみ。翻刻は東山御文庫本を底本とし、他の諸本や文献を校合に用い、訓読文を付している。付章二は、東北大学附属図書館蔵本(岡本本)の『三合勘文部類』に捺された六つの蔵書印のうち、「牧氏蔵書之記」印の解明を通じて、本書の伝来を追う。「牧氏」を特定することはできなかったが、蔵書印から判明する本書の伝来は、江戸幕府の天文方を務めた渋川家にはじまり、19世紀半ばに「牧氏蔵書之記」印が捺され、さらに数学者の岡本則録のものとなり、西野家を経て東北帝国大学に寄贈されたことを証明する。最後に、終章では、本論全体を総括し、今後の展望を述べる。そして、1047件に及ぶ「日本古代の祈雨儀礼」資料(目録)を付す。

以上の論文について、審査委員それぞれの所見が述べられ、かつ論文提出者との間で質疑応答がおこなわれた。まず、本論文は、これまで研究と関心が希薄であった分野を、実証的かつ体系的にあらたに切り拓いたものとして高く評価できるとの所見が全審査委員から出された。とくに、神祇・仏教・陰陽道と祈雨との関係を歴史的にとらえ直したこと。祈雨に関する空海伝説の形成過程解明。古代の災害認識として天皇の「不徳」、「崇」、「理運」の三段階があり、それは「積層性」を帯びていたこと。「理運」関係の史料解析が優れていること、などである。ついで、各審査委員から以下のことについて質問がなされた。すなわち、縄文・弥生時代の「カミ」観念の位置づけ。古代の自然環境に関する研究の理解。神祇・仏教・陰陽道の基本的な差異。災害認識としての「崇」の位置づけ、などが主なものである。これらに対して、論文提出者は、本論文の範囲で詳細に応えた。ただ、今後の研究課題も得られたとする。しかし、残された課題によって本論文の高い達成度が損なわれるものではなく、諸方面への貢献も期待される本論文は、博士学位の授与に値する論文であると全審査委員が等しく認めるところである。

公開審査会開催日	2018年 1 月 25 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	新川 登亀男	日本古代史	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	川尻 秋生	日本古代史	博士(早稲田大学)
審査委員	国立歴史民俗博物館・准教授	小倉 慈司	日本古代史	博士(東京大学)
審査委員				
審査委員				

